

るのに、この文章がいささかなりとも役立ってくれば、この上ない喜びである。

旅順での終戦体験

神奈川県 勝江 明 男

関東州旅順市、私の生まれ故郷であり、二十年間の青少年時代を過ごし、ここで終戦を迎えた生涯忘れることのできない町である。

旅順は関東州の最南端に位置し、人口十四万二千人、うち日本人一万三千人、旅順港に注ぐ龍河を境に新旧両市街に分かれ、更に海軍要港部、旅順要塞司令部等の陸海軍の施設があり、市内の大部分が要塞地帯で、日本の大陸進出の拠点だった。

旅順港に面した市街地は、幅広いアカシア並木の道路網とロシア時代の赤レンガ造りの欧風建築物が数多く残っていて美しい町並みを構成し、後背地を山に囲まれ、中国東北部では最も気候温暖な地域で、周辺に

工場地帯もなく、居住地としては理想的な環境の街だった。

私は大正十五年三月、新市街明治町で生まれ育ち、住まいは市内で何回か変わったが、終戦でソ連軍に追い出されるまで旅順に住んでいた。

終戦時、我が家は五人家族で、私を除く四人は新市街大迫町に住み、私は旅順工科大学予科に在学中で新市街西端月見ヶ丘の工大興亜寮から通学していた。

両親が旅順に来たのは大正四年か五年ごろだが、どういふ事情で生後まもない長男を抱えて東京から来たのか、詳しいことはわからない。

父は、旅順中学校寄宿舎の医務室に勤務し、生徒の健康管理に当たっていた。仕事の性質上、風邪や伝染病が流行したときには長期間寄宿舎に泊まりこんで病人を看護したり、また中学の教職員や生徒以外にも、近所の人や知人の家族に病人が出ると往診したりしていた。私が小学校三年のとき、五十一歳で急逝。あとに母と五男一女が残された。当時、一家は新市街赤羽町の官舎住まい。長兄と次兄が旅順工科大学予科生、

三兄と姉と私が小学生、弟が就学前という状況で、本来なら大学在学中の二人を残して内地へ引き揚げるはずだが、内地へ帰っても生計が成り立つ見通しがなく、引き続いて旅順に残ることになった。

昭和十三年から十四年にかけて長兄、次兄が大学卒業後、社会人としての生活も一年足らずで相次いで兵役に就き、次兄は内地の部隊から中国本土を転戦、途中一度だけ休暇をとって旅順の自宅へ軍服姿で重い軍刀下げて帰ってきたことがある。土産に当時珍しいチョコレートを持ってきた。二週間ぐらいいたが、その間、学生時代の友人と頻繁に会ったり、一人で近くの山へ行って旅順の風景を眺めたりしていた。家では戦闘の様子とか軍隊の話は一切せず、「旅順も予想以上に物不足で生活も大変だろうが、俺が帰ってくるまで頑張ってくれ」と言い残して旅順駅を発って行ったのが、最後の別れになってしまった。「支那にいる間は絶対に死ぬようなへまはやらない」と心強いことを言っていたが、いつのまにか比島に転戦していて、昭和二十年七月、ミンダナオ島で戦死。所属部隊が全滅し

たらしく、戦死時の詳細は一切わからず遺骨も無かった。

小学校時代の六年間と中学二年（昭和十四年）までは、日本の国力が充実している最後の時代で、物資も豊富で、古き良き時代の日本の面影が残るのんびりとした生活をしていたが、一方、世相は小学校入学前年の満州事変に始まって上海事変、満州国建国。小学校六年のときには蘆溝橋事件から日中戦争へと突入し、戦時色が強まってきて、私の青少年時代は常に戦争と一緒に歩んできた。

昭和十五年ごろから衣料品や主要食料品が配給切符制となり、人絹、スフ等の代用品が登場し、革製品、ゴム製品が姿を消してゆき、日常生活がやや不自由になってきた。学校の授業は軍事教練が強化されたが、未だ勤労働員もなく、卒業するまで充分に勉強することができた。軍事教練では、三年生のころから三八式歩兵銃の操作訓練があり、これを担いでの行進は銃が重くて大変だったが、射撃訓練はゲーム感覚で一番楽しかった。

中学四年のとき、太平洋戦争勃発。開戦当日、教職員生徒全員が校庭に整列して校長から開戦に関する訓示があった。先生方の服装が軍服まがいの国民服に変わり、背広姿が街から消え、生徒の服装は入学当初から詰め襟の学生服でなく、国防色の教練服で、襟のついたシャツまで着用を禁止された。

昭和十八年三月、中学卒業。この年、中学同期のN君が予科練に入隊することになり、級友数人で壮行会をして彼を激励した。卒業以来一年間、勤めもせず灰色の生活を続けていたが、当時はアツツ島守備隊玉砕が伝えられ、前線で将兵が死闘を繰り返し、銃後では学童まで勤勞奉仕に駆り出された国家総力戦の最中で、この年ほど肩身の狭い思いをしたことはなかった。

昭和十九年四月、旅順工科大学予科に入学。大陸科の殿堂といわれた栄えある学校に、希望に燃えて入学はしたものの、戦局は急激に悪化。すでに文系学生は兵役猶予措置がなくなつて、学徒兵が続々出陣し、私自身、徴兵検査を受ける年齢（満十八歳）に達して

おり、白線帽の青春を謳歌するどころか、戦時色が一段と強まった大学の教育方針のもとで、正常な授業がいつ打ち切られるのか心配だった。この年の夏休みはなく、予科生全員が大連郊外の周水子飛行場に動員され、戦闘機を格納する掩体壕建設作業を二カ月間やらされた。宿舎は大格納庫で、板敷にアンペラが敷き詰められていた。軍の指導下で作業をしているので、食事だけは充分で、内容も寮の食事よりはるかに良かった。飛行場には迷彩色の軍用機が数機常駐。機種はわからないが、ずんぐりした双発機もあり、ときどき離着陸していた。掩体作りの作業は、ショベルとモッコだけの恐ろしく原始的な方法で、掩体一基は、戦闘機一機が格納できる大きさで、半球体のコンクリート製、鉄筋も鉄骨もなし。機銃掃射ぐらいいは耐えられるかもしれないが、直撃弾を受けたら崩壊しそうな構造だった。

土曜日、半日だけ授業があったような気がするが、よく覚えていない。机も黒板もなく、連日の肉體労働で真面目に講義を聞いている者はいなかったと思う。

日曜日は休みで外出が許されたので、旅順の自宅に帰り、ゆっくりお風呂に入って一週間の汗を流して、再び汽車で作業宿舎に戻る。旅順駅から周水子まで当時一時間ぐらいかかった。

八月末、一年生だけ学校に帰されて、二学期の授業再開。軍事教練はますます強化され、即戦力要員として鍛えられ、重機関銃の操作まで教わった。授業は正常どおり続けられたが、冬になると燃料不足で教室の暖房が効かない。それでも教授は熱心に講義し、生徒はかじかむ手でノートにペンを走らせた。寮の食事は質量ともに低下し、補食しないと足りず、夏の動員のときに食べ過ぎた反動がきた。食事以外に困ったことは本屋に本がなかったこと。

食料品店や衣料品店に品物が無いのと同様、本屋の棚に本が並んでいなかった。教科書や専門書は学校を通して購入できるが、一般文学書が手に入らない。たまたま入荷するというので、時々ぞいて運良く本が置いてあれば買った。漱石でも鷗外でもチェーホフでもモーパッサンでも誰の作品でもよかった。戦時中は紙

も軍需物資で、小説、雑誌類は粗悪な用紙で製本されているため、頁数のわりに分厚い本になっていた。

この冬、旅中出身の丁君が結核で旅順病院へ入院。級友数人でお見舞いに行ったが、手遅れだったのか、まもなく亡くなられた。当時、結核は命取りの病気だった。暖房も切れた寒々とした病室で、息苦しうに病魔と闘っていた彼の顔が今でも思い出される。その時、一緒に見舞いに行った級友二人が感染して、戦後、大連や内地引揚後発病した。私もその時感染したらしいが、知らない間に治っていて、結核痕だけ今も残っている。

年末、大連に米機飛来。学校でも家庭でも防空壕造りが始まった。大迫町の我が家も、知り合いの満人に頼んで庭に造ってもらった。たたみ一畳ぐらいの広さで、中腰でやっと入れる程度の壕を掘り、五分板を渡し土を被せただけの、野菜の貯蔵庫みたいなものだった。

二十年五月、新入生は未だ入ってこない。土城子の海軍飛行場へ動員されているとのこと。五月になっ

て、学校教職員や文系学徒に続々召集令状がきた。私の小学校時代の担任の岡田先生、中学校の担任だった畑田先生も召集されて、お二人とも帰らぬ人となった。両先生とも、私の青少年時代の人格形成に最も大きな影響力を与えてくれた方で、そのご恩は一生忘れられない。

授業は五月まで続けられ、六月、満鉄沙河口工場へ動員されたが、一カ月足らずで私を含む一部の者が再び学校へ戻されて、今度は学校の工作室を利用し、海軍の監督官のもとで手榴弾の鑄造作業をやらされた。

二十年八月九日、突然、ソ連軍が国境を越えて満州に侵入。内地から遠く離れていて最も安泰だといわれていた聖域が戦場になった。

関東軍反撃のニュースは全くなく、逆にソ連軍南下の噂だけ広がったが、不安感とか、動揺するひまもなく、第二国民兵の国土防衛召集令が発令。医理工系学徒の徴兵猶予措置が撤廃され、ペンを銃にかえる時がきた。

八月十一日から十三日にかけて、何故か、我々より

一つ年下の生徒たち（徴兵検査前の予科一―二年生の一部）に先に召集令状がきて、適齢期の我々が逆に彼らを見送ることになってしまった。残った予科生と先輩の本科生には、令状がきたらいつでも出発できるよう待機命令が出たので、十四日、身辺整理のため外泊許可をとって大迫町の自宅へ帰ったが、その日どう過ごしたかは覚えていない。翌十五日は全学生に集合命令が出ていたが、当日の朝、正午に重大放送があると聞いたので、学校へ行くのをやめて家で聞くことにした。

正午、玉音放送が流れる。陛下の声を初めて聞いた。雑音が多くて聞きにくかったが、戦争が終わったことだけわかった。はじめは事態がよくのみこめず、ポツダム宣言受諾が無条件降伏と理解するまでには少し時間がかかった。一般市民には、関東軍がソ連軍侵攻と同時に北滿を放棄して、防衛線を大きく後退させたことなど知らされず、また、関東州が直接戦火にさらされているわけでもないの、本土決戦を叫ぶ大本営発表だけが唯一の情報源のもとでは、敗色濃厚な事

態になっていることはわかっていても、降伏という形で戦争が終結することは考えられなかった。

終戦発表直後の市内は、満人が興奮して騒ぎ出すこともなく、意外に静かだった。まだ日本人も満人も、戦争終結という事態をよく把握しておらず、また、旅順には海軍の大部隊と警察が健在だったためかもしれない。

玉音放送を聞いて、すぐ学校へ戻ったが、学校全体があわただしい空気に包まれていたこと以外、よく覚えていない。しばらくして、授業再開の見込みがないこと、動員態勢が解除されたこと、内地出身者以外は自宅へ帰っていいことがわかった。ただ列車の運行状況がわからず、道中も危険なので、大連より先は無理だといわれていたが、なかには危険をおかして北上した人もいた。残っている者は、不測の事態に備えて学校や市民を守るよう指示されたが、終戦直後、旅順大連地区では、市民を巻き込むような大規模な暴動事件が起きなくて幸いだった。

寮では、張りつめていた緊張感が切れて、茫然自失

の状態から、すぐに現実的な問題について様々な憶測がとんだ。ソ連軍がいつ入ってくるのか、日本人はどうなるのか、誰にもわからないので不安と動揺は隠せなかった。

八月十八日ごろから、国土防衛召集で入隊した連中が、軍から支給された衣料品や食料品を背負って帰ってきた。入隊直後に終戦で、召集解除になったのと、全員無事に生還できてよかった。

そのころ、学校側から突然、予科二年生の残留組で部隊を編成して、水源地の警備に行くことになったから待機するようにといわれ、寮に残っていた十数人が指名された。私も家に帰らず寮にいたので、その要員になってしまった。警備の要請がどこからきたのかわからない。なんでも水源地の施設を完全な形でソ連に引き渡すためという。

八月二十二日、三八式歩兵銃と実弾を渡され、二人の武装警察官に引率されてトラックで出発。行先は金州近郊の北大河水源地。現地到着まで二時間ぐらいかった。八月二十二日はソ連軍の先遣隊が土城子飛行

場に到着した日で、我々はそんなこととは知らずに北大河に向かっていた。

北大河（金州）水源地は大連市民の水瓶である。警備といつても資材が盗まれないように監視するだけだが、堰堤で囲まれた広大な貯水池を見て、大集団で襲われたら防ぎきれないだろうと思った。出発のとき、旅順郊外でも警察官派出所が襲われたと聞いていた。

ましてここは満人部落に囲まれたところで、夜間交替で歩哨についたときは、演習と違うので恐怖感があった。二三日後、ソ連軍が我々と交替するため来るとの連絡があったので、武器を床下に埋めて待っていると予定どおり数人の兵士がジープでやって来た。初めて会ったソ連軍の兵士たちは、すでに我々のことを聞いていたらしく、警戒心もなく威嚇することもなく、友好的に対応するように言われてきたらしい。夜、有り合わせの料理でささやかな歓迎宴をしてやったら、盛んにスパシィーバを連発して最後に歌まで出て、なごやかな雰囲気だった。しかしこのとき感じたソ連軍兵士に対する好意的なイメージは、旅順に帰ってから

打ち砕かれた。帰る日（二十五日ごろ）、日本人の服装のままでは危険なので、近所の住民と交渉して毛布と満服を交換。中国人の格好で出発し、汽車で旅順へ向かった。車中では途中駅から銃を持った保安隊らしい一団が乗り込んで来たが、気付かれずにすんで助かった。同行の警察官はいつのまにか姿を消した。

旅順へ帰ってみると市内にはソ連軍が進駐しており、家屋の接収が始まり、学校などの公共施設と高台にある高官の官舎および陸軍官舎が立ち退きを命じられた。市内で見たソ連軍兵士は、水源地で初めて会った兵士と違って中央アジアかモンゴル系の顔立ちをした者が多く、また、スラブ系でも手に刺青をした者もいて粗暴さが目立った。腕時計を欲しがり、女を求めて歩きまわり、家屋に押し入って略奪暴行する者もいて、軍警察の取り締まりが強化されるまで不安な状態が続いた。満鉄や満電の社員の家には、その社員であるというロシア語で書かれた証明書が玄関に貼ってあり、その家には押し入って来ないということだった。

八月下旬、旅順方面特別根拠地隊が武装解除され

て、工大の校舎および寮に移ってきた。その時、大量の衣料品と食料品を持ってきた。また寄宿舎住まいの女学生も避難してきたが、ソ連軍が寮にも乱入するようになったので、すぐほかへ移っていった。

九月はじめ、工大に滞在していた海軍部隊に出発命令が出た。どこへ連れて行かれるのかわからないが、旅順駅まで荷物の運搬を手伝って別れを告げた。海軍部隊が出発してまもなく学校および寮も接収されることになった。海軍部隊が残っていた物資はソ連軍が来る前に自由に持ち出していいと言われたので、物資が格納されている予科校舎に取りに行って驚いた。さすが海軍である。配給でわずかしか手に入らなかつた小麦粉、小豆、砂糖、味噌、醬油、食料油、乾パン、缶詰類、甘味品などの食料品および衣料品が山積みされていた。小麦粉などの食料と綿布一反を大迫町の自宅へ持ち運んだので、当分食いつなぐことができた。水源地の警備から帰ってきてから、昼間は寮に行き夜は家にいるようにしていたが、姉のことが一番心配だった。姉は断髪して私の古い洋服を着ていたが、す

ぐ見破られそうなので、家の中に踏み込まれそうになつたら裏口から両隣のどちらかに避難できるように、お互いに連絡を取り合っていた。

家の向かい側に陸軍病院があったが、ソ連軍進駐と同時に接収され、入院中の傷病兵はどこかに連れて行かれてソ連軍の兵舎になってしまった。そのため、家の前は兵士の往来が激しく夜中に何回か起こされた。ドンドンと玄関の戸を叩かれたとき、相手が酔っぱらっている場合は、何をされるかわからないので息をひそめて立ち去るのを待った。ある日、夜十時ごろ戸が叩かれ、穏やかな声で呼んでいるようなので開けてみると、「レポート、レポート」と言われて向かいの建物に連れて行かれてトラックの荷降ろし作業をやらされた。トラックには銃、軍服、軍靴、ヘルメット、毛布など軍用品が梱包もされず雑然と積まれていて、降ろすのに苦労した。日本の軍隊では、兵器は陛下のご下賜品であり、その取り扱いには特に厳重だったと聞いていたので、平気で占領地の住民に扱わせる無神経さに驚いた。このとき、私のほかに数人の日本人がい

た。

九月十日ごろ、新市街の日本人全員に立ち退き命令が出た。予想はしていたが、二十年近く住みなれた故郷を離れるときの気持ちはなんとも言えなかった。最も心残りだったのは、昨年十月に鎮座祭が行われたばかりの関東神宮に一度もお参りできなかったことである。中学低学年のころ参道建設工事に勤労奉仕で参加した思い出があり、旅順市民としてその落成を待ち望んでいたのに、どうしてお参りに行かなかったのか悔やまれた。従って私は本殿の荘厳な姿を知らない。

ソ連軍の命令はいつも時間的余裕を与えてくれない。慌ただしく引越しの準備をし、家具類は、ちやぶ台以外は全部置いて行くことにした。本も同様に捨てた。隣近所の人たちと一緒に荷馬車を連ねて旧市街へ行き、家族が旧市街のどこへお世話になったのか覚えていないが、私だけ家族と離れて、土建屋のおやじさんと私より年下のK君ともう一人職人らしき人と四人で、ソ連軍のパン製造所の裏の空き家に住み込み、男だけの奇妙な生活が始まった。場所は賑やかな通り

で、敦賀町近辺だったと思うがはつきりしない。パン製造所は、昔からあったパン屋に隣接した倉庫らしい建物を改造したもので、中にれんがの巨大なパン焼き窯を据え付けて兵士用のパンを大量に作っていた。ただ、製造所に水道設備がないため、我々が住んでいた裏の家からホースで給水していたので、パン焼きの兵士たちと親しくなり、時々パンの恩恵にあずかったり、兵士たちによるパンの横流しを手伝ったりした。その代わり給水タンクへの注水作業をやらされた。

土建屋のおやじさんのついで、ソ連軍のビル建築現場で四〜五日働いた。場所は市街地から離れた道路沿いの平坦地としか記憶にない。仕事は、基礎工事の段階で石を積み重ねて隙間にセメントを詰めていく作業で、昼食つきで日当五円ぐらいだったと思う。現場には民間人十数人のほか、捕虜になった大勢の日本兵が働かされていた。上半身裸に乗馬ズボンで、かつては当番兵に毎日ピカピカに磨かせていたであろう長靴を泥まみれにして、ショベルを握っていた青年将校の姿が印象的だった。昼食には黒パンと乾燥卵のスープが

出た。黒パンはパン製造所で作っていた円盤状の黄色っぽいパンと違って角形で、酸っぱい味がして粗穀のようなものが混じっており、「こんなまじいパン、世の中にあるのか」と思ったが、後日、大連へ移ってからは、こんなパンでさえ高価で口にすることができなくなるとは、当時は夢にも思わなかった。

十月初め、旅順の日本人全員に退去命令が出て、旧市街からも追い出された。パン製造所の責任者のカピタンと交渉してパン二個約十食分を調達し、土建屋のおやじさんとK青年とも別れた。一緒にいた職人はいつのまにかいなくなっていた。簡単なロシア語を教えにくれたり、給水のことでも口論したり、見つければ重罰になりそうな危ないことも一緒にした兵士たちともさよならした。ダスヴィダーニヤ（さようなら）。

旧市街内で離れて住んでいた家族と合流し、移転の準備をする。家具類は新市街に置いてきたので無いが、ふとん、衣類、炊事用具、食料品、豆炭、コンロ、写真集、日用品などを町で手配してくれた荷馬車二台に積み込み、家族五人が分乗し、道路に並んで出

発を待っている隊列に加わる。三十台ぐらい集まった。リーダーの人から、満人に襲われる恐れがあるので絶対に単独行動はとらないこと、大事なものは荷物の内側に入れておくことなどの注意があった。西部劇の幌馬車隊みたいに隊列を組んで先頭車両にリーダーが乗り、真ん中辺りと最も襲われやすい最後尾には、屈強な若者を乗せて出発。大連に着くまでに、途中二カ所ソ連軍の検問所があり、用意した酒数本を渡してトラブルもなく通過。道中では馬車のスピードがちょっとでも落ちると、満人（主として子供）がまとわりついて積み荷からはみだしているものを抜き取ろうとするので、そのつど棒で追っ払った。

大連に午後到着。隊列を解散してそれぞれ知人宅などへ向かった。私の家族のように行き先のないものは、一緒に常盤寮というところで生活することになった。場所はほとんど記憶にないが、寮の名前から推測して小村公園に近い常盤町が栄町通だったと思う。繁華街からはずれた坂の途中にあった。

大連では町が広いせいいか、ソ連軍兵士の姿は旅順は

ど多くなく、代わりに中国の保安隊が巡察したり行進しているのが目立った。

大連での生活は、最初はほかの人たちと同じように売り食いでしのいでいた。旅順でめぼしいものは売ってしまったので、売る物もあまりなかったが、父親の背広、ワイシャツ、ネクタイなど持ち出して街頭で並べていると、背広はロシアでは珍しいのか、すぐ売れた。大柄なロシア人にはサイズが合わないと思うのだからお構いなしに買ってしまった。

売る物がなくなつて最後に持ち出したのが、母が大車にしていた指輪など数点の宝石類。これは最も換金しやすく、中国人のブローカーがすぐ買ってくれるが、値段の交渉が難しい。にせ物だとか傷があるとか難癖をつけて買い叩こうとする。こちらも宝石の時価を知らないし、母からはそんなに高価なものではないと聞いていたので、複数のブローカーにあたって適当な値段で売却したが、思ったほど高くは売れなかった。これで数カ月はしのげると思ったが、その後によつてきたインフレでそんなにはもたなかった。世の中

が無政府状態になり、経済が混乱状態になったとき、万国共通で貨幣に代わっていつでも通用するのが、貴金屬だということをこのとき痛感した。

ある日、街頭で中学の児玉先生と出会い、私たちの担任だった畑田先生のご遺族が困っておられるので、何とかしてあげられないかと相談を受けたが、私個人ではどうしようもなく、また同級生に連絡のとりようもなく、大変申し訳ないとは思つたが、そのままになつてしまった。ソ連軍が軍票を発行するようになってから、急激に物価が高騰しインフレが進んだ。紙幣を乱発しているから当然だが、日本の通貨は使えなくなり、収入源がない日本人はたちまち困窮状態に陥つた。軍票は赤、青、緑のカラフルな紙幣で紙質も悪かつた。市場には米、小麦粉、砂糖、肉まん、饅頭など何でも店頭に並んでいるが、高く買って買えない。日常の食事は、トウモロコシの粉のお粥にネギを混ぜたものか、高粱飯。中国人の常食と同じになったただけだが、おらずに満足なものがないため、健康な大人はなんとか持ち堪えられたが、乳幼児と病人は栄養失調でバタ

バタ死んでいった。

二十一年の春先、同じ寮の人と一緒に逢坂町の清掃作業を引き受けることになった。売る物もなくなつて困っていたときなのですぐ飛びついた。月給千円。極限状態の生活をしていても千円では足りないが、毎月まとまった現金収入があるのはありがたかった。

我が家には母と小兒麻痺を患つて身体の不自由な姉、中学時代から療養を続けていた病身の兄、それに弟がいた。弟は、近所の人から頼まれた物品の委託販売をして手数料を稼いでいたが家計の足しにはならぬ。そこへ元から大連に住んでいた従兄弟たち三人が、時々相談にきた。両親が戦争末期に相次いで亡くなって孤児になり、さらに戦争が激しくなつて内地にも帰れず、そのまま残つて終戦をむかへ、女学校を出たばかりの長女が二人の弟の面倒をみていた。相談に來られても家が狭いので同居させるわけにはいかず、「困ったときには、いつでも來なさい」とは言つたものの、非情なようだが生活費を援助する余裕もこちらになかった。來たときに、トウモロコシのお粥を食べ

させ、数日分の食料を持たせて帰らせることぐらしかできなかった。

清掃の仕事は朝八時から夕方六時までのハードな肉体労働だったが約半年続けた。この間、ゴミ捨て場のことで保安隊とトラブルがあったり、兵隊狩りにあたりした。兵隊狩りとは終戦時、日本の軍人や警察官で、收容所に入れられる前に脱走して、民間人に紛れ込んで姿を隠した人たちを捜し出すことで、元使用人などの密告によるものが多く、特に憲兵と警察官に対する追及は厳しかった。また私の場合のように、街頭でそれとなく探りを入れてくるやり方もある。なれなれしく流暢な日本語で、「お仕事大変ですね」と話しかけ、話の合間にさりげなく「前は何をやっていたのですか、兵隊さんですか」と聞いてくる。この時の表情の変化や反応でわかるらしい。「学生だ」と言う「そうですか」と言つて立ち去つた。

清掃の仕事をやめた後、兄と二人で漬物屋を始めた。兄の健康も戦後の慌ただしい動きのなかで、いつのまにか回復して働けるようになった。朝早く手押し

車を押し、沙河口近くの市場で仕入れ、戻る途中にある広場で店を出す。時々路上整理の保安隊に追い出されるが、保安隊がいなくなるとまた店を出す。売る物は、たくあんとキュウリの塩漬で、引揚げ直前までこの商売を続けたが、真冬の寒風にさらされての店はこたえた。

引揚船の噂は「二十一年五月頃、満州方面日本人の壺蘆島から引揚げが始まる」と真実性を帯びてきた。しかし、なかなか船は大連港にやっこない。面白いことに、引揚げの噂がでるたびに価値のなくなった日銀券の相場が上がり、街頭で中国人が紙幣を手にひらひらさせながら「両替、両替」と通行の日本人に呼びかけていた。

実際に引揚げが始まったのは、二十一年十一月末か十二月になってからで、最初は最も悲惨な生活をしてきた満州からの避難民や重病人が優先的に帰され、あとは地域単位で順番に引揚船を待った。

我々の地域に集合命令が出たのは、引揚げも終わりに近づいた三月二十日ごろで、時計、貴金属などは押

収される恐れがあるので、目立たないところにしまっておくこと、立派な服装は避けることなどの注意があった。事実、この注意を守らず、背広姿で革のトランクなど持った人が、乗船時にソ連の検査官の前を通るとき、呼び止められて洋服をぬがされ、持ち物全部を徹底的に検査されている姿を目撃した。

手持ちの軍票は使えなくなるので、全部はたいて、下着とちり紙と食べ物を購入し、身の回り品とアルバムから剝がした写真や思い出の品をリュックサックと行李に詰めて、集合場所の広場へ行った。ここで五百〜六百人単位で団を編成し、埠頭の収容所へ。家族全員、栄養失調寸前の状態だったが、母を除いて皆若かったのも、なんとか体力を維持できた。三月二十二日、乗船した船は岸壁を離れ、二十年余り過ごした生まれ故郷に別れを告げた。

三月二十五日、博多へ上陸し、初めて日本の土を踏んだ。検疫、DDTの洗礼を受け、頭から白い粉をかけられた。翌日、神奈川県藤沢市の長兄宅に到着。しばらく身を寄せることになった。兄も満州育ちである

が、兵役も勤務先も内地だったため、一家のなかでは一番運が良かった。ただ、戦後の食料難時代に満州から引き揚げてきた母、弟妹たちの面倒をみることになつて、大変な苦勞をしたと思う。

引揚げ後、残念だったのは次兄の戦死を知らされたこと。大連で苦勞をとにした三兄が、大連での無理がたたつて病気が再発し、引揚げ後まもなく死亡。弟も昭和四十年ごろ病魔におかされ入退院を繰り返して死亡。母はこれから楽になるという矢先に交通事故で死亡、七十四歳だった。結局、一人で人並みの人生を送ることができたのは、長兄と姉と私の三人だけだった。兄は平成六年に死亡。姉は自身が身体障害者の身でありながら、横浜、大和両市で社会福祉事業に従事し、平成七年に、兄の後を追うように他界した。我が家で旅順のことを知っているものは私一人になってしまった。

興亜の志に燃えて、大陸で技術者の道を歩もうとした私の夢は戦争で大きく狂わされたが、引揚げ数年後、大手石油会社に職を得て定年まで勤め、現在は横

浜市郊外で、老妻と二人で精神的に最も安定した毎日
を過ごしている。

愚直の青春、二、一二八日間

神奈川県 小川之夫

大正生まれの私は、毎年八月十五日の終戦記念日が近づくと、なぜか心気が高揚してならない。まして昭和六十二年の六月に、私の青春そのものであった、我が母校『哈爾浜学院史』が刊行されてから、なおさらその感が強くなった。

この『哈爾浜学院史』をむさぼるように読んでいたある日のこと、妻が、亡父の遺品の中から古びた紙包みを持ち出してきた。

それは昭和十九年四月、哈爾浜学院に入学するため関釜連絡船に乗り、下関から釜山に向かい、それから哈爾浜で入隊するまでの間に、両親あてに私が出した手紙七十三通と、シベリア抑留時代の往復通信などの